

再帰代名詞束縛の Form Copy 分析

中村 丞汰

1. 導入

本稿は現代英語の再帰代名詞束縛を極小主義の観点から分析することを目的としている。Koster (1984)によれば、再帰代名詞束縛は(1)に示す4つの特性を持つ(α は先行詞、 γ は再帰代名詞を指す)。

- (1)
 - a. *Obligatoriness*: α and γ are obligatorily linked.
 - b. *Uniqueness of α* : There is only one α for each γ .
 - c. *Prominence*: α c-commands γ .
 - d. *Locality*: α and γ are in the same domain β . (Koster (1984: 418))

これらの特性に統語的説明を与えるため、極小主義の枠組みの下でこれまで様々な分析が提案されてきたが、その中でも Hornstein (2001)の移動分析を概観し、その問題点を指摘する。その後、代替案として Chomsky (2021)で提案された Form Copy に基づく分析を提示し、指摘した問題点を含むいくつかの言語事実に対して説明を与える。

2. 先行研究

本節では極小主義の下で提案されてきた再帰代名詞束縛の分析のうち、Hornstein (2001)の移動分析について概観する。移動分析の下では、再帰代名詞束縛は再帰代名詞内からの先行詞のA移動として説明される。具体的には、(2)に示すように、再帰代名詞は先行詞 *John* と形態素 *self* が併合された *John-self* の形で派生に導入され、再帰代名詞内の *John* が主語位置まで移動する。

- (2)
 - a. John likes himself.
 - b. [TP John [T T [VP John [VP likes John-self]]]]

しかし、この分析には(3)に示す2つの主な問題がある。

- (3)
 - a. 島の内部に再帰代名詞が生起する例が説明されない。
 - b. θ 理論を破棄している。

(4)は(3a)の具体例である。(4a)では等位構造内に、(4b)では付加詞内に、(4c)では主語名詞句内に再帰代名詞が生起している。しかし、一般的にこれらの環境からの要素の抜き出しは不可能であるため、移動分析の下では(4)の例が全て不適格であると誤って予測されてしまう。

- (4)
 - a. John_i praises himself_i and Mary. (Boeckx et al. (2007: 36))
 - b. Max_i saw a ghost near himself_i. (Antonenko (2012: 30))
 - c. John_i said that the pictures of himself_i are published in the newspaper. (Antonenko (2012: 8))

また、(2)の派生では *John* のコピーからなる連鎖が2つの θ 位置を含むため、Hornstein (2001)は θ 理論を破棄し(cf. (3b))、単一の連鎖が持つことのできる θ 役の数に制限はないと仮定しているが、 θ 基準は言語固有の条件(LSC)であるというChomsky (2021)の立場に従えば、 θ 基準を遵守した分析の方が望ましいと言える。

したがって、本稿では、これらの問題点を克服しつつ、(1)に示した再帰代名詞の特性を捉えられる分析を提案する。

3. Form Copy と理論的背景

本節ではChomsky (2021)における極小主義理論を概観し、本稿で用いる Form Copy (FC)と θ 理論を提示する。Chomsky (2021)では言語の基本的特性は強い極小主義命題(SMT)の下で第三要因に準拠する形で単純化されるべきであると示唆されている。この示唆に基づいて、併合は(5)のように定義される。

- (5) Merge (X_1, \dots, X_n, WS) = $WS' = \{X_1, \dots, X_n, W, Y\}$, satisfying SMT and LSCs. (Chomsky (2021: 20))

この定義の下では、併合はSMTとLSCsを満たしつつWorkspaceに適用される。また、派生はマルコフ的であると仮定されるため、計算システムは複数の同一の書き込みがどのように派生に導入されたのかを区別することができない。そのため、Chomsky (2021)では併合とは独立した操作としてFCを提案し、この操作により複数の同一の書き込みに対してコピー関係が付与される。

この分析の重要な点は、 θ 理論のUnivocalityを捉えられることである。Univocalityは θ 理論の重要な特性の1つであり、(6)に示されるように、コピー関係にある複数の要素が単一の θ 役付与子から2つ以上の θ 役を受け取ることを禁じる。

- (6) (Revised) θ -Theory
A θ -assigner τ assigns one and only one θ -role to elements θ -linked to $P(\tau)$. (Chomsky (2021: 27))

これに従えば、コピー関係にある2つの統語対象が単一の θ 役付与子から2つ以上の θ 役を付与されることはできないが、それらが別の θ 役付与子から異なる θ 役を付与されることは可能である。

重要なことに、Chomsky (2021)ではFCに基づく再帰代名詞束縛の分析が示唆されている。

(7) John_i likes himself_i.

(7)では先行詞 *John* と再帰代名詞 *himself* が同じ動詞から θ 役を付与されているため、もし FC が *John* と *himself* の間に適用され、コピー関係が付与されるならば、(6)の θ 理論の違反が生じてしまうことになる。

次節では FC に基づく再帰代名詞束縛の分析を提案し、実際には θ 理論の違反は起こらないと主張する。

4. 再帰代名詞束縛の Form Copy 分析

ここで採用する理論的仮定は(8)から(10)の3点である。

- (8) ラベリングの際に特定の機能主要部とその指定部を占める要素間で素性共有が行われる。
(定形節の TP 指定部: ϕ 素性, CP 指定部: Q 素性, 属格位置: D 素性)
- (9) あるフェイズ主要部 H の補部 YP は、H の上位のフェイズ主要部 Z が最小探索によって検知できなくなった時にアクセス不可能になる。
- (10) フェイズレベルでの操作は次の順序で適用される: Form Copy > Labeling > Transfer

これらの仮定に基づき、Chomsky (2021)におけるコントロール構文の PRO と同様に、再帰代名詞も先行詞との同一指示解釈を得るために、FC により先行詞とのコピー関係が付与されるべきであると提案する。

(11) 再帰代名詞は先行詞とのコピー関係を付与されなければならない。(Nakamura (2023: 63))

(12)の例を用いて FC 分析を概観する。まず、(12b)に示すように Hornstein (2001)に従い、再帰代名詞は *John*₃ と *self* が外的併合された *John*₃-*self* として派生に導入され、加えて Gelderen (2000)や Hicks (2009)に従い、(13a)に示すように、*self* は NP であり、FC を受ける要素は D 主要部に存在し、全体で DP 構造をなすと仮定する。その後、*John*₃-*self* は *likes* と併合し、*John*₂ が vP 指定部に外的併合される。そして、(12c)に示すように、FC が *John*₂ と *John*₃ に適用され、コピー関係が付与された後に *John*₃ が削除される。*John*₃ は削除されたため、ラベリングにとって不可視となり、再帰代名詞の構造は(13b)に示す NP の構造になる。したがって目的語の θ 役は *self* に付与されることになり、 θ 理論の違反は生じない。その後、(12d)に示すように、*John*₁ が TP 指定部に導入され、(12e)に示すように、*John*₁ と *John*₂ に FC が適用される。最後に、*self* は拘束形態素であり、単独で音声具現ができないため、音韻部門で代名詞 *him* が挿入され、(12a)の文が産出される。

- (12) a. John likes himself. (= (2a))
b. [_{vP} John₂ [_{vP} V [_{vP} likes John₃-self]]]
c. [_{vP} John₂ [_{vP} V [_{vP} likes ~~John~~₃-self]]] (Form Copy)
d. [_{TP} John₁ [_{TP} T [_{vP} John₂ [_{vP} V [_{vP} likes ~~John~~₃-self]]]]]
e. [_{TP} John₁ [_{TP} T [_{vP} ~~John~~₂ [_{vP} V [_{vP} likes ~~John~~₃-self]]]]] (Form Copy)
- (13) a. [_{DP} John [_{NP} self]] b. [_{NP} ~~John~~ [_{NP} self]]

この FC 分析は(1)で示した再帰代名詞の4つの特性について説明を与えることができる。また、FC 分析は移動に依拠していないため、Hornstein (2001)の分析にとって問題である島の内部に生起する再帰代名詞も派生することができる。(4c)は長距離束縛の例であり、再帰代名詞はフェイズ主要部 C の補部である埋め込み節の TP 内に生起しているが、(9)の仮定により、次のフェイズである主節の vP が完成するまでアクセス可能であるので、FC により vP 指定部を占める先行詞とのコピー関係を付与されることができる。

最後に、(14)に示す、再帰代名詞が定形節の主語位置や属格位置に生起できない事実についても説明可能である。

- (14) a. * John_i thinks that himself_i is a good man.
b. * John_i likes himself_i's brother. (Nakamura (2023: 66))

(15)に示すように、これらの例における再帰代名詞内の *John* が FC によって不可視になることで、定形節の主語位置では ϕ 素性、属格位置では D 素性の素性共有ができず、ラベリングがなされないため派生が破綻する。

- (15) a. * [_{vP} ~~John~~₁ [_{vP} thinks [_{CP} that [_{<, ϕ >} ~~John~~₂-self [_{vP} is a good man]]]]]
b. * [_{CP} [_{TP} John₁ [_{vP} ~~John~~₂ [_{vP} likes [_{<, D >} ~~John~~₃-self's brother]]]]] (cf. Nakamura (2023: 67))

5. 結語

本稿では極小主義の枠組みの下で再帰代名詞束縛の FC 分析を提案し、この分析が(1)に示す4つの特性を捉えられるだけでなく、(3)に示す Hornstein (2001)の問題点も克服することができることを示した。加えて、再帰代名詞が生起できない(14)の事実について、ラベリングの観点から統語的説明を与えた。このように、FC 分析は再帰代名詞束縛に関する経験的事実を特別な素性や操作を仮定することなく説明できるため、SMT をより強く遵守するという観点からも有益な分析であると考えられる。

主要参考文献

- Chomsky, Noam (2021) "Minimalism: Where Are We Now, and Where Can We Hope to Go," *Gengo Kenkyu* 160, 1-41.
Hornstein, Norbert (2001) *Move! A Minimalist Theory of Construal*, Blackwell, Oxford.
Nakamura, Shota (2023) "A Form Copy-Based Analysis of Reflexive Binding," *Linguistics and Philology* 42, 51-74.